

# 教 育 研 究 業 績

2026年 5月 14日

氏名 小西 瑞穂  
学位：博士（心理学）

|   |   |  |
|---|---|--|
| 研 究 分 野   | 研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド                     |  |
| 健康心理学・臨床心理学   | 心理教育・ストレス・予防                            |  |
| 主要担当授業科目  | 健康心理カウンセリング・健康心理心理実習・臨床心理学・発達心理学・教育心理学等 |  |
| 教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項   |   |  |
| 事項  | 年月日                                     | 概要   |
| 1 教育方法の実践例  |   |  |
| (1) 医学科・看護学科学生に対する精神科臨床実習指導における能動的な心理学セミナーを実施                               | 2004年4月1日～<br>2009年3月31日                | 心理士としての役割、およびチーム医療について、心理検査の概略と医療場面で行われる心理検査の依頼や活用法について講義を行い、実際に心理検査を各学生に実施し、自ら読み取れるようになることを目的に、指導を行った。また、実際に患者への集団精神療法にも参加してもらい、その必要性と治療効果についての講義も行ってきた。  |
| (2) 文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業「再就職及びキャリアアップを可能にするための新しい実践的な臨床心理士研修コース」 責任担当教員 | 2007年4月1日～<br>2009年3月31日                | 心理学を専攻する大学院を修了したにも拘わらず、心理学に関係する職に就いていない者、または臨床心理学に強い関心を持ち、実務経験を積みたいという熱意を持っている者を対象として、精神科において実践的な臨床心理研修を実施した。講義等の受動的な学習のみならず、実際に患者と接し、心理検査、心理療法、相談業務を見学・体験し、受講者がこれらを実際行えるようになることを目指した。週1回1日、この研修の指導にあたり、かつ、この研修の指導補助の心理士5名の育成も行った。                         |
| (3) 臨床心理士第一種指定大学院補助業務   | 2009年4月1日～<br>2010年3月31日                | 臨床心理士指定大学院において、大学院生の指導補助および運営補助を行った。   |
| (4) 講義「カウンセリング論」での実践的ワークを取り入れた講義展開  | 2010年4月1日～<br>2011年12月10日               | 毎回の講義毎にその日学習するカウンセリング技法や理論に役立つワークを取り入れ、学生らの興味を惹きつけ、学習内容が記憶に残りやすいよう工夫した。  |
| (5) ゼミでのグループ発表および個人発表   | 2010年4月1日～<br>2011年12月10日               | ゼミにおいて、小グループを作り、他者と協力する能力およびわかりやすく他者に伝える工夫を行う能力を育成し、またそれらを生かして個人発表し、プレゼン能力を高める工夫を行った。  |
| (6) 講義「心理療法実習」での小グループワーク  | 2010年4月1日～<br>2011年12月10日               | 毎回、グループを替え、グループ内にて心理療法を実践的に学習するよう工夫した。   |
| (7) 学習効果および学習意欲を高める大講義でのコミュニケーションカードと小テスト                                   | 2010年4月1日～<br>2011年12月10日               | 大人数の講義では、少人数の講義に比べ学生の学習意欲を保ったり、学習効果を向上させることが難しいことが多い。そこで、学生とのコミュニケーションのツールとして毎時間、学生に出席カードと併用したコミュニケーションカードを配り、講義の感想や生じた質問を書いてもらうことにしている。また、そこから出た質問や感想を次回の講義の初めに Feedback をして学生の興味関心を惹き、学習効果や意欲を高める工夫を行っている。また、小テストを行い、次回の講義に答え合わせを行うことで、さらなるそれらの向上を図っている。 |
| (8) 大学院での「カウンセリング論」担当   | 2011年4月1日～<br>2011年7月31日                | 名古屋市立大学大学院看護研究科において、カウンセリング論を担当。カウンセリング論の歴史を紹介し、医療現場で働く者に必要な基礎的なカウンセリングマインドと、心理アセスメントについて講義を行った。   |

|  |                       |  |
|--|-----------------------|--|
| (9) 臨床心理士・公認心理師養成の大学院実習指導教員  | 2021年4月1日～2024年3月31日  | 東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科ならびに大学院心理学研究科において、臨床心理士・公認心理師養成のための実習の指導・巡回指導を行っている。   |
| 2 作成した教科書、教材   |                       |  |
| (1) 『APA 心理学大辞典』の一部を担当   | 2013年9月30日            | ストレス関連項目を担当し、邦訳を行った。   |
| (2) 『心理学概論 (ナカニシヤ出版)』の作成   | 2014年4月20日            | パーソナリティの章を担当。パーソナリティに関わる様々な視点(文化、ジェンダー、人間一状況論争、行動遺伝学、パーソナリティ障害)について執筆した。   |
| (3) 『パーソナリティ心理学入門 (ナカニシヤ出版)』の一部を担当   | 2018年10月20日           | 自己愛人格傾向尺度 (Narcissistic Personality Inventory-35; NPI-35) についての解説を行った。   |
| (4) 『健康心理学事典 (丸善出版)』の一部担当  | 2019年10月9日            | エビデンス・ベースド・メディスン (EBM)、エビデンス・ベースド・プラクティス (EBP) を担当し、解説を行った。  |
| 3 教育上の能力に関する大学等の評価   |                       |  |
| (1) 東海学院大学 FD 推進センター実施の授業評価アンケートにおいて、学生より高評価を得た (5 点満点中全ての講義において 4.5 点以上を獲得)   | 2011年4月21日            | 総合評定 (5 点満点) において、4 年ゼミ 4.8 点、3 年ゼミ 5 点、2 年ゼミ 5 点と高評価を得た。実習でも、心理学検査実習 4.55 点、心理療法実習 4.83 点と高評価であった。講義においても、カウンセリング論 5 点、青年心理学 4.59 点であった。  |
| (2) 東海学院大学人間科学部心理学科卒論ゼミにおいて、卒論指導したゼミ生が卒業論文優秀賞を受賞した。                            | 2009～2011年度           | 2009 年度は 1 名、2010 年度は 2 名、2011 年度は 3 名が受賞した。   |
| (3) 関東学院大学実施の授業評価アンケートにおいて、生涯発達学の講義に対して学生より高評価を得た (5 点満点中全ての講義において 4.5 点以上を獲得) | 2014年8月22日、2015年8月22日 | 非常勤講師として担当した生涯発達学の講義について、学生から得た授業評価アンケート内のすべての評価項目において、5 点満点中 4.5 点以上を獲得した。自由記述欄でも、「とてもわかりやすかった」「初めて講義を楽しみと思えた」「1 講時だったが、毎週楽しみに講義に臨めた」などのポジティブな内容の記述を全 85 名中 52 名から得た (自由記述記入者は 53 名であった)。 |
| (4) 明治学院大学実施の授業評価アンケートにおいて、「心の健康」の講義に対して学生より高評価を得た。                            | 2018年8月               | 非常勤講師として担当した[講義について、学生から得た授業評価アンケート内のすべての評価項目において、5 点満点中 4.4 点以上を獲得した。   |
| (5) 昭和女子大学実施の授業評価アンケートにおいて、「感情人格心理学」の講義に対して学生より肯定的評価を得た                        | 2019年8月               | 非常勤講師として担当した講義について、学生から得た授業評価アンケート内の 7 項目について、肯定的評価を得ることができた (設問 1 : 98.1%、設問 2 : 96.2%、設問 3 : 81.9%、設問 4 : 89.5%、設問 5 : 92.4%、設問 6 : 94.3%、設問 7 : 94.3%)。本講義は公認心理師受験資格対応科目である。            |
| (6) 昭和女子大学実施の授業評価アンケートにおいて、「臨床心理学」の講義に対して、学生よりすべての項目に対して 100% の肯定的評価を得た        | 2019年8月               | 非常勤講師として担当した講義について、学生から得た授業評価アンケート内の 7 項目について、肯定的評価を得ることができた (設問 1 : 100%、設問 2 : 100%、設問 3 : 100%、設問 4 : 100%、設問 5 : 100%、設問 6 : 100%、設問 7 : 100%)   |
| 4 実務の経験を有する者についての特記事項  |                       |  |
| (1) 滋賀 SST 研究会事務局長   | 2004年4月1日～2021年3月31日  | 滋賀県への Social Skills Training の普及のため、年 2 回の研究会の開催とニューズレターの発行、外部講師の招聘を院内ならびに他施設の関係者と協働して行った。   |
| (2) 滋賀医科大学緩和ケアチームスタッフ  | 2004年4月1日～2009年3月31日  | 末期ガン患者の心理的介入およびスタッフからのコンサルテーション業務、院内研修会での講演  |
| (3) 病院および学校への Social Skills Training および心理教育の導入                                | 2004年4月1日             | まず、所属していた滋賀医科大学附属病院に Social Skills Training や心理教育を導入した。その後、滋賀県下の病院や施   |

|   | ～現在                                    | 設へのそれらの導入のサポートを行っている。また、スクールカウンセリングを行っている学校にもそれらを導入し、現在は他の学校への導入のサポートも行っている。さらに現在は、病院や施設などに実際に赴いて導入を行ったり、講演活動などを積極的に行っている。また、2010年1月には日本心理教育・家族教室ネットワーク家族心理教育インストラクター取得した。 |
|---|--|--|
| (4) 精神鑑定補助（心理検査担当）                                | 2005年2月、2006年2月、2008年7月                | 精神科医と共に被疑者の責任能力の有無の検討を行った。   |
| (5) スクールカウンセリング                                   | 2007年2月1日～2011年9月30日                   | 中学・高等学校において、生徒・教員・保護者を対象に週1回のスクールカウンセリング業務を行っている。また、対象者への心理教育を講演や小グループなどの形で、積極的に行っている。   |
| (6) 滋賀医科大学栄養治療チームスタッフ                             | 2008年1月1日～2009年3月31日                   | 心理的要因による摂食不良患者への心理的介入およびスタッフのコンサルテーション業務   |
| (7) 大学病院での家族心理教育実施およびスーパービジョン                     | 2009年4月1日～2010年3月31日、2009年6月1日～2011年3月 | 滋賀医科大学附属病院精神神経科の統合失調症患者の家族への心理教育、および名古屋市立大学病院こころの医療センターにおける統合失調症患者およびうつ病患者それぞれの家族への心理教育の実施を補助し、スーパービジョンを行った。   |
| (8) 国立成育医療研究センター生体防御系内科アレルギー科における家族心理教育の実施        | 2014年4月～2023年3月                        | 食物アレルギー患者の保護者を対象に家族心理教育を行い、保護者のストレス介入を実施している。その効果について、現在検討を行っている。  |
| (9) 環境省子どもの健康と環境に関する全国調査第二回検査担当者研修での講師            | 2015年1月、3月                             | 10万人を対象としたエコチル調査の中で実施する5000人を対象とした詳細調査の実施にあたり、全国で統一した手技・方法でデータ収集を行う研修会において、「グループワーク②実行プランの作成」の講師を行った。ストレングスマodelを利用し、実施機関でも問題点や障壁を明確化し、前向きに取り組めるよう講義ならびにグループワークを行った。       |
| (10) 環境省子どもの健康と環境に関する調査(エコチル調査)4歳詳細調査説明会「グループワーク」 | 2017年1月                                | エコチル調査の詳細調査について、対象者が2歳時に実施した調査の経験をもとに、4歳の調査をどのように乗り越えるか、フォーカスグループを行った。   |
| (11) 東京都北区教育総合相談センター 所内研修(スクールカウンセラー研修) 講師        | 2021年10月、2022年3月、12月、2023年2月           | 北区教育総合相談センター教育相談員、北区スクールカウンセラー等を対象とした事例検討会での講師を務め、学校での子どもや保護者、教員への対応の留意点について助言を行った。  |
| 5 その他<br>なし                                       |  |  |
| 職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項                           |  |  |
| 事項  | 年月日                                    | 概要   |
| 1 資格、免許<br>(1) 日本心理教育・家族教室ネットワーク家族心理教育インストラクター取得  | 2010年1月                                | 全国各地で「標準版家族心理教育研修会」などを開催することを通して、心理教育およびその基礎となっている精神科医療や治療、ケアに対する考え方と実践方法を普及定着させていく役割。   |
| (2) 公認心理師   | 2019年2月5日                              | 2019年2月5日登録、登録番号 第13074号   |

|  |   |  |  |
|--|---|--|--|
| 2 特許等<br>なし  |   |  |  |
| 3 実務の経験を有する者についての特記<br>事項<br>なし  |   |  |  |
| 4 その他<br>(1) 新潟県中越地震こころのケア全国大学<br>チームへの参加<br><br>(2) 国立成育医療研究センター生体防御系<br>内科部アレルギーセンター臨床研究員  | 2004 年<br>11 月<br><br>2022 年 4<br>月～現在  | 新潟県中越地震こころのケア全国大学チーム・滋賀医科大学チ<br>ームの心理士として参加<br><br>食物アレルギー治療の心理面への影響についての研究を行って<br>いる。               |  |
| 研 究 業 績 等 に 関 する 事 項   |   |  |  |
| 著書、学術論文等の名称  | 単著・共<br>著の別   | 発行又は発<br>表の年月  | 発行所、発表雑<br>誌等又は発表<br>学会等の名称  |
| (著書)<br>1. 心理学概論<br><br>2. パーソナリティ心理学入門<br><br>3. 健康心理学事典  | 共訳<br><br>共著<br><br>共著  | 2013 年 9 月<br><br>2018 年 10 月<br><br>2019 年 10 月   | 培館風<br><br>ナカニシヤ出版<br><br>丸善出版   |
| (学術論文)<br>1. 自己愛人格傾向と精神的健康との<br>関連性ーストレス過程およびイリ<br>ュージョン的側面からの検討ー<br><br>2. 対人場面におけるあいまいさへの<br>非寛容が精神的健康に与える影響<br><br>3. 自己愛人格尺度(NPI-35)の作成の<br>試み(査読付)<br><br>4. Psychological characteristics<br>and the efficacy of<br>hospitalization treatment on DSPS<br>patients with school refusal. (査<br>読付)<br><br>5. 大学生の自己愛人格傾向と自我状<br>態との関連(査読付)<br><br>6. 自己愛人格傾向とポジティブ・イリ<br>ュージョンとの関連 | 単著<br><br>共著<br><br>共著<br>(筆頭<br>執筆者)<br><br>共著<br><br>共著<br>(筆頭)<br><br>共著<br>(筆頭) | 2004 年 3 月<br><br>2004 年 3 月<br><br>2006 年 1 月<br><br>2007 年 1 月<br><br>2008 年 3 月<br><br>2008 年 3 月 | 同志社大学文学<br>研究科心理学専<br>攻<br>大学院修士論文<br>(未公開)<br><br>同 志 社 心 理 ,<br>vol. 51, 1-9.<br><br>パーソナリティ<br>研究, Vol. 14,<br>214-226<br><br>Sleep and<br>Biological<br>Rhythms, vol. 5,<br>p. 15-22.<br><br>滋賀医科大学雑<br>誌, vol. 21, 4-8.<br><br>同志社心理, vol.<br>54, 7-18.   |
|  |   |  | 自己愛人格傾向の測定尺度である Narcissistic<br>Personality Inventory-35 を作成し、信頼性妥<br>当性を検討した。本尺度を使用し、自己愛人格傾<br>向の高い者の退陣ストレス場面でのコーピング<br>を検討した結果、自己愛人格傾向の高い女性は、<br>ポジティブイリュージョンをコーピングの代役<br>として用いていることが明らかになった。<br><br>素因ーストレスモデルによって、対人場面におけ<br>るあいまいさに非寛容な者のストレス脆弱性が見<br>出された。<br><br>日本版自己愛人格傾向尺度 Narcissistic<br>Personality Inventory-35(NPI-35)を作成し、そ<br>の信頼性・妥当性の検討を行った。<br><br>健常中学生との比較を通し、概日リズム睡眠障害<br>を呈し不登校状態にある思春期・青年期の入院患<br>者の入院治療の効果と心理的要因を検討した。入<br>院治療により、90%以上の患者に睡眠覚醒リズム<br>の改善が認められた。入院治療後に改善状態が持<br>続しない患者の傾向には攻撃性の低さ、感情抑制<br>傾向、社会的関心の乏しさ、自責感の強さがあっ<br>た。<br><br>大学生の自己愛人格傾向の高い者の特徴として、<br>責任感が強く、現実的・効率的で、感情をストレ<br>ートに表現しやすく、協調性に乏しく、融通の利<br>かない面がある一方で、世話好きな面もあるとい<br>うことが明らかとなり、精神的健康の良い状態と<br>関連していることが見出された。<br><br>自己愛人格傾向の高い者の自己概念は非現実的<br>にポジティブに捉えられており、精神的健康の高<br>い状態と関連がある。 |

|  |            |         |  |   |
|--|------------|---------|--|---|
| 7. 自己愛人格傾向についての素因—<br>ストレスモデルによる検討 (査読付)   | 共著<br>(筆頭) | 2008年9月 | パーソナリティ<br>研究 ,<br>vol. 17, 29-38.   | 素因—ストレスモデルにより、自己愛人格傾向の<br>高い者のストレス脆弱性が見出された。その一方<br>で、ストレスの少ない状況において自己愛人格傾<br>向が精神的健康を部分的に支える働きが見出さ<br>れた。  |
| 8. 自己愛人格傾向と両親の養育態度<br>との関連   | 単著         | 2009年3月 | 東海学院大学紀<br>要 , vol. 3,<br>125-127.   | 自己愛人格傾向の高さは両親の受容的で愛情深<br>い養育態度と関連があった。  |
| 9. 自己愛人格傾向のパーソナリテ<br>ィ構造とそのストレス過程の検討   | 単著         | 2009年3月 | 同志社大学文学<br>研究科心理学専<br>攻<br>大学院博士論文   | ストレッサーの少ない状況では自己愛人格傾向<br>の低い者や平均的な者に比べて最も精神的健康<br>状態が良いことが見出され、自己愛人格傾向の精<br>神的健康を支える働きが認められた。その一方<br>で、ストレッサーの多い状況では最もストレス反<br>応を示しやすく、自己愛人格傾向はストレスに脆<br>弱な素因とすることができる。 |
| 10. 自己愛人格傾向と養育態度との<br>関連が精神的健康に及ぼす影響につ<br>いて   | 共著<br>(筆頭) | 2009年3月 | 同志社心理 vol.<br>56, 45-52.   | 自己愛人格傾向の形成にはこれまで指摘されて<br>いた母親の養育態度の影響に加えて、父親の養育<br>態度の影響が大きく認められた。また、自己愛人<br>格傾向は自尊感情を高め、孤独感を抑制すること<br>が見出された   |
| 11. Schizophrenic patients have a<br>preference for symmetrical<br>rectangles: A comparison with<br>preferences of university<br>students. (査読付) | 共著         | 2009年6月 | International<br>Journal of<br>Psychiatry in<br>Clinical<br>Practice.<br>vol. 13,<br>p. 147-152. | 統合失調症患者は健康者と比べて、より対称的な<br>図形を好む傾向があり、それは彼らの思考の硬さ<br>や柔軟性の乏しさが関連していると考えられる。  |
| 12. 統合失調症患者の家族心理教育の<br>立ち上げと継続 (査読付)   | 共著<br>(筆頭) | 2010年3月 | 滋賀医科大学雑<br>誌 , vol. 23,<br>31-35.  | 統合失調症の家族心理教育を立ち上げ、病院に位<br>置づけるには様々な職種と情報交換するために、<br>十分なアフターミーティングの時間が必要であ<br>る。また、情報交換によって、スタッフ間の信頼<br>関係が強まる。  |
| 13. 自己愛人格傾向の高い者の他者操<br>作行動が友人からの評価に与える影<br>響   | 共著<br>(筆頭) | 2010年3月 | 東海学院大学紀<br>要 , vol. 4,<br>167-172.   | 自己愛人格傾向の高い者は様々な他者操作行動<br>を用い、友人から様々なイメージを受けることが<br>わかった。これは、自己愛人格傾向の高い者の対<br>人関係の不安定性や自己評価の不安定性を示唆<br>する結果と考えられる。   |
| 14. 慢性期統合失調症患者への個人<br>Social Skills Training の試み   | 単著         | 2010年3月 | 東海心理臨床研<br>究 , vol.<br>5, 45-53.   | 集団への抵抗を示した慢性期の統合失調症患者<br>に対して、個人 Social skills training を行っ<br>た。その結果、明らかに非言語的表出が増え、精<br>神的健康が向上し、精神症状が改善した。  |
| 15. ある病院の家族心理教育導入初期<br>の2年間の関わり～心理教育普及ガ<br>イドラインおよびツールキットを用<br>いてのコンサルテーション～ (査読<br>付)   | 共著         | 2010年4月 | 家族療法研究 ,<br>vol. 27, 167-177.  | 心理教育を病院に位置づけるための取り組みを<br>実践報告形式で紹介した。心理教育コンサルタント<br>は取り組むスタッフの良いところを引き出し、<br>エンパワメントすることが重要である。   |
| 16. 自己愛人格傾向の高い者の対人関<br>係と疎外感との関連   | 共著<br>(筆頭) | 2011年3月 | 東海心理臨床研<br>究 , vol. 6,<br>17-26.   | 男女共に自己愛人格傾向は対人関係において自<br>己中心的な他者操作を行うことが見出され、男性<br>の自己愛人格傾向は疎外感を直接的に抑制し、女<br>性の自己愛人格傾向は親密な対人関係によって<br>疎外感を高めることが明らかとなった。  |
| 17. とある新米研修医の体験—ツール<br>キットを用いた家族心理教育施設導<br>入の試み— (査読付)   | 共著         | 2011年3月 | 精神科治療学 ,<br>vol. 26,<br>371-376.   | 大学病院への心理教育導入の過程を紹介した。そ<br>れには仲間作りが最も重要で、スタッフ間でエン<br>パワメントしながら長期的に取り組むことが重<br>要である。  |
| 18. Pre-post changes in<br>psychosocial functioning among<br>relatives of patients with<br>depressive disorders after Brief                      | 共著         | 2011年4月 | BMC Psychiatry,<br>vol. 11, p56-62.  | うつ病は再発もあり、経過の長い疾患である。そ<br>のため、家族の負担も多く、家族が精神疾患に罹<br>患することも多い。そこで、家族に4回を1クル<br>ルとする心理教育を行った。その結果、家族の精  |

|  |         |          |   |  |
|--|---------|----------|---|--|
| Multifamily Psychoeducation: A pilot study. (査読付)  |         |          |   | 神的健康などが大幅に改善した。短期家族心理教育は、家族の精神疾患予防に有効であり、そのことで患者本人の神的健康の向上にも役立つと考えられる。   |
| 19. 家族のような身近な植物との関係  | 単著      | 2013年4月  | 住まいと電化, vol. 25, 5-7.   | 植物が心理的に良い効果をもたらすことや、癒し効果を持つことを示した研究の総説。  |
| 20. 大学生のハーディネスとコーピング - ストレスとQOLの2次元からの検討 -   | 共著 (筆頭) | 2014年3月  | 東海心理臨床研究, vol. 9, 20-29.  | 大学生を対象にストレスとQOLの2次元の神的健康とストレス・コーピングおよびハーディネスとの関連を検討した結果、状況に積極的に関わっていくことが、ストレス度が低くQOLが高いという神的健康の高い状態と関連していることが明らかになった。                            |
| 21. A comparison of self-rated and female partner-rated scales in the assessment of paternal prenatal depression. (査読付)  | 共著 (筆頭) | 2016年11月 | Community Mental Health. Vol. 52, 983-988.                              | 妊娠中の女性とその男性パートナーを対象に、男性パートナーの抑うつについて、本人評価と女性パートナーからの評価に相違があるかを検討した。その結果、女性パートナーは男性パートナーの抑うつを正確に評価することが難しく、男性の抑うつについては本人に直接評価を求める必要があることが明らかとなった。 |
| 22. Evaluating the effect of the program conducted with the teachers to improve communication skill for middle and high school students and their parents. (査読付) | 単著      | 2017年5月  | Journal of Medical Education and Training. Vol 1, Issue 2, 009.         | コミュニケーションに問題のある中高生を対象に、Social Skills Training (SST) を行い、その保護者に家族心理養育を行った。その結果、生徒の社会技能は向上し、生徒と保護者の神的健康が向上した。生徒へのSSTと保護者への家族心理教育を同時変更して行うことが望ましい。  |
| 23. Allergic Profiles of Mothers and Fathers in the Japan Environment and Children's Study (JECS): a nationwide birth cohort study. (査読付)                        | 共著      | 2017年8月  | World Allergy Organization Journal. Vol. 10 (1), 24.                    | エコチル調査における、父親と母親のアレルギー疾患罹患率について報告したプロファイルペーパーを作成した。  |
| 24. Regional difference of infant 250HD levels in Pilot Study of Japan Environment and Children's Study. (査読付)   | 共著      | 2017年11月 | Pediatrics International. 60(1):30-34. doi: 10.1111/ped.13410           | 日常の習慣や環境要因の地域差は日本の乳児の250HDレベルに影響する。  |
| 25. Allergy and Mental Health Among Pregnant Women in the Japan Environment and Children's Study. (査読付)  | 共著      | 2017年12月 | Journal of Allergy and Clinical Immunology in practice. 6(4):1421-1424. | 妊婦のアレルギーはうつ病などの精神障害との関連があり、生活の質の低下と関連している。   |
| 26. Having small for gestational age infants was associated with maternal allergic features in the JECS birth cohort. (査読付)                                      | 共著      | 2018年5月  | Allergy. 73(9), 1908-1911   | 母親のIgE感作やアトピー性皮膚炎がSGAのリスクとなる可能性があり、アトピー性皮膚炎については出生身長よりも出生体重にその影響が強いことが示唆された。   |
| 27. Prevalence of Congenital Anomalies in the Japan Environment and Children's Study. (査読付)  | 共著      | 2018年9月  | Journal of Epidemiology. 2018, 1-10. DOI: 10.2188/jea.JE20180014.       | エコチル調査における主要な先天性形態異常の有病率の記述を実施した。エコチル調査の先天性形態異常のデータは一定の妥当性があった。  |
| 28. Risky Health Behaviors of Teenage Mothers and Infant Outcomes in the Japan Environment and Children's Study: A Nationwide Cohort Study. (査読付)                | 共著      | 2018年11月 | Journal of Pediatric and Adolescent Gynecology. 32(2), 146-152.         | 10代の妊娠中の母親は喫煙率が高く、精神的なストレスが高かった。   |
| 29. Sleep status varies by age among Japanese women during preconception and pregnancy in a nationwide birth cohort study [the                                   | 共著 (筆頭) | 2018年11月 | Sleep and Biological Rhythms. 17(4), 161-172.                           | 妊娠した女性の睡眠は年代によって異なり、若い女性ほど他の年代に比べて睡眠の問題を感じており、睡眠による休息感が少なかった。  |

|  |            |          |  |  |
|--|------------|----------|--|--|
| Japan Environment and Children's Study (JECS)]. (査読付)  |            |          |  |  |
| 30. Complications and adverse outcomes in pregnancy and childbirth among women who conceived by assisted reproductive technologies: a nationwide birth cohort study of Japan environment and children's study. (査読付) | 共著         | 2019年2月  | BMC Pregnancy and Childbirth 19(1), 77.  | 生殖補助医療(ART)によって妊娠した女性は、高度な産科医療を必要とする母体/周産期の合併症のリスクが高かった。   |
| 31. Tentative development of a psychoeducational program for alleviating psychological burden of mothers of young children with milk allergy. (査読付)  | 共著<br>(筆頭) | 2019年2月  | Journal of Health Psychology Research. 31(2), 183-193.   | 牛乳アレルギー児の母親に心理教育プログラムを行った結果、子どもの牛乳アレルギーによる精神的負担を軽減することが示唆された。  |
| 32. Egg antigen was more abundant than mite antigen in children's bedding: Findings of the pilot study of the Japan Environment and Children's Study (JECS). (査読付)   | 共著         | 2019年3月  | Allergology International, 19, 1-3   | 子どものベッドシートの埃中に鶏卵抗原は100%検出され、ダニ抗原よりも高濃度であった。  |
| 33. Medical and Surgical Complications in Pregnancy and Obstetric Labour Complications in the Japan Environment and Children's Study (JECS) Cohort: A Birth Cohort Study. (査読付)                                      | 共著         | 2019年11月 | Journal of Obstetrics and Gynaecology, 28:1-7.   | エコチル調査における妊娠合併症の発症の記述統計を行った。本研究の結果は日本周産期統計から公表された同時期の妊娠合併症の統計とほぼ一致していた。  |
| 34. Determinants of Alcohol Consumption in Women Before and After Awareness of Conception. (査読付)   | 共著         | 2020年2月  | Maternal and Child Health Journal, 24(2):165-176.  | 多くの女性は妊娠に気づいてから飲酒をやめていた。妊娠に気づいた後も飲酒を続けた女性は、社会的弱者で心理的ストレスが大きい傾向にあった。  |
| 35. Time course of metabolic status in pregnant women: The Japan Environment and Children's Study. (査読付)   | 共著         | 2020年2月  | Journal of Diabetes Investigation <a href="https://doi.org/10.1111/jdi.13238">https://doi.org/10.1111/jdi.13238</a> 2020.2 | エコチル調査参加者の妊娠中の血液中の糖・脂質代謝に関する属性について検討した。参加者の約半数は、妊娠中の血糖コントロールの推奨目標6.5%未満のHbA1cレベルである一方、約5.0%は一般的に推奨される目標7.0%よりも高いHbA1cレベルであった。血糖コントロールが十分ではない妊婦が一定数いることが示された。 |
| 36. Changes in Dietary Intake in Pregnant Women From Periconception to Pregnancy in the Japan Environment and Children's Study: A Nationwide Japanese Birth Cohort Study. (査読付)                                      | 共著         | 2020年3月  | Maternal and Child Health Journal, 24(3):389-400.  | 妊娠に気づく前も後も乳製品以外の食事はほとんど変わらなかった。妊娠に気づいてから食事摂取基準を満たさなかった栄養素は、ビタミンB群、ビタミンC、飽和脂肪酸、食塩であった。  |
| 37. Association between blood lead exposure and mental health in pregnant women: results from The Japan Environment and Children's Study. (査読付)  | 共著         | 2020年6月  | Neurotoxicology, 7:191-199.  | 血中鉛濃度の違いによって妊婦を5つのグループに分け、うつ症状を有することのリスクに違いがあるかを調べた結果、妊婦の血中鉛濃度とうつ症状との間に関連はなかった。  |
| 39. Cumulative inactivated vaccine exposure and allergy development among children: a birth cohort from Japan. (査読付)   | 共著         | 2020年9月  | Environmental health and preventive medicine 25.1 (2020): 1-10.  | 生後12か月の子どもの喘息、喘鳴、湿疹の有病率は、生後6か月前の不活化ワクチンの曝露量に関連している可能性があることが示唆された。  |
| 40. Association between maternal vegetable intake during pregnancy and allergy in offspring: Japan Environment and Children's Study.   | 共著         | 2021年1月  | PLoS One. Vol. 16(1) e0245782 番号 doi:10.1371/journal.pone.0245782. PMID:33507986; PMCID:PMC7842951                         | 母親の妊娠中のヘモグロビン、ヘマトクリット値、食事による鉄摂取量とその子どもの幼児期におけるアレルギー発症との関連を検討した。その結果、有意な関連は示されなかった。   |

|  |    |         |  |   |
|--|----|---------|--|---|
| 41. Association of Maternal History of Allergic Features with Preterm Pregnancy Outcomes in the Japan Environment and Children's Study.  | 共著 | 2021年2月 | Int Arch Allergy Immunol. vol. 182, p. 650-662. doi: 10.1159/000513749. Epub ahead of print. PMID: 33601376  | 母親のアレルギー性疾患は、アトピー性皮膚炎を除いて、TPL のリスクを高める可能性がある。母親のアレルギー障害と周産期の有害な結果の併存症は、さらなる調査を必要とする。  |
| 42. Association of Hemoglobin and Hematocrit Levels during Pregnancy and Maternal Dietary Iron Intake with Allergic Diseases in Children: The Japan Environment and Children's Study (JECS).   | 共著 | 2021年3月 | Nutrients, 13(3), 810.   | 母親の妊娠中のヘモグロビン、ヘマトクリット値、食事による鉄摂取量とその子どもの幼児期におけるアレルギー発症との関連を検討した。その結果、有意な関連は示されなかった。  |
| 43. Dietary supplement use in elementary school children: a Japanese web-based survey.   | 共著 | 2021年6月 | Environ Health Prev Med. Vol. 26(1), 63 doi: 10.1186/s12199-021-00985-7. PMID: 34090343.   | 日本の子どもは、主に非ビタミン、非ミネラルサプリメントを使用することが示された。また、子どもの栄養補助食品の使用と、スポーツ参加との関連性が示された。スポーツ参加者のための栄養補助食品使用のガイドラインを作成する必要性が示唆された。  |
| 44. Hypertensive disorders of pregnancy and risk of allergic conditions in children: Findings from the Japan Environment and Children's study (JECS).  | 共著 | 2021年9月 | World Allergy Organization Journal. Vol. 14, 100581. <a href="http://doi.org/10.1016/j.waoj.2021.100581">http://doi.org/10.1016/j.waoj.2021.100581</a> . | 妊娠高血圧症(HDP)は、子どものアレルギー発症の危険因子ではないことが示された。   |
| 45. Longitudinal study of the relationship between number of prior miscarriages or stillbirths and changes in quality of life of pregnant women: the Longitudinal study of the relationship between number of prior miscarriages or stillbirths and changes in quality of life of pregnant women: the Japan Environment and Children's Study (JECS). (査読付) | 共著 | 2023年4月 | BMC Pregnancy and Childbirth, 23(1):297.   | 妊娠中のQOLの変化については、流産・死産歴のある妊婦は、流産・死産歴のない妊婦に比べて、妊娠初期は精神的なQOLは低下したが、妊娠中期・後期には大きく上昇した。   |
| 46. Health-related quality of life of mothers and developmental characteristics of very low birth weight children at 2.5 years of age: results from the Japan Environment and Children's Study (JECS). (査読付)   | 共著 | 2023年7月 | Health and Quality of Life Outcomes, 21, Article number: 68.   | 母親の精神的HRQOLは日本語版年齢・病期質問紙(J-ASQ-3)で評価した発達地帯(SDD)と独立して関連していたが、共変量を調整した後は関連性が無かった。社会的つながりとパートナーの協力が母親のHRQOLと子どもの発達に与える影響についてはさらなる調査が必要である。                                     |
| 47. Parental stress and food allergy phenotypes in young children: A National Birth Cohort (JECS).   | 共著 | 2024年1月 | Allergy, 10.1111/all.16035. Advance online publication. <a href="https://doi.org/10.1111/all.16035">https://doi.org/10.1111/all.16035</a>                | 食物アレルギーの子どもを持つ親は、育児ストレススコアが有意に高くなることが明らかとなった。種類別の調査では、鶏卵アレルギーについても同様の傾向が見られた一方で、牛乳、小麦、ナッツアレルギーでは明確な関係性は認められなかった。  |
| 48. 主要原因食物による食物アレルギー児および保護者の心理的負担-質問紙調査を用いた横断的検討- (査読付)  | 共著 | 2026年3月 | 小児アレルギー学会誌 40 巻 1号: 9-16.  | 乳幼児の3大アレルゲンである卵・牛乳・小麦を対象に、保護者と食物アレルギー児の心理面や経験したアレルギー症状との関連について、質問紙調査による横断研究を行い、原因食物の違いが治療過程の心理面に与える影響を探索的に検討した。その結果、原因食物によって、原因食物に対する恐怖感や拒否感、保護者や食物アレルギー児自身の精神的健康との関連が異なった。 |
| (その他)<br>(翻訳書)   |    |         |  |   |

|  |              |          |  |   |
|--|--------------|----------|--|---|
| 1. あなたにもできる脳活性化－会話療法でアンチエイジング－               | 共訳           | 2007年9月  | フレグランスジャーナル                            | 加齢に伴う脳の変化についての解説と、老いていく脳の適応力や創造性を保つための方法を提案した翻訳書。(Robert W. 2003 Living with an aging brain. Freud Publishing House.)<br>担当部分: 第5章”生き生きとした心”の有利な点<br>P. 69-76.                                      |
| 2. APA 心理学辞典                                 | 共訳           | 2013年9月  | 培風館                                    | American Psychiatric Association 作成した心理学事典のストレス関連項目の翻訳を担当した。<br>G. R. ファンデンボス監修 APA Dictionary of Psychology<br>担当部分: sociopetal, stratum, strength of an attitude, stressor, stressor aftereffects |
| (総説・解説)                                      |              |          |  |   |
| 1. 子どもの食物アレルギーとストレス                          | 単著           | 2025年12月 | 教育と医学<br>慶應義塾大学出版会, 74(1):44-51.       | 増加傾向にある子どもの食物アレルギー疾患とストレスの関係について<br>、子どもの食物アレルギーが本人と親のストレスにどのような影響を与えているか、ストレス軽減に向けた対応、また家庭や学校における留意点などを解説した。   |
| (学会発表・ポスター発表)                                |              |          |  |   |
| 1. 自己愛傾向と養育態度との関連からみた精神的健康について               | 共同発表<br>(筆頭) | 2003年9月  | 日本性格心理学会第12回大会                         | 自己愛人格傾向の形成には父親の養育態度の影響が強く、精神的健康には良い影響を与えることが見出された。  |
| 2. 自己愛人格傾向尺度(NPI-35)の作成に関する一研究               | 共同発表<br>(筆頭) | 2003年11月 | 日本健康心理学会第16回大会                         | 自己愛人格傾向尺度(NPI-35)の妥当性・信頼性について検討し、それらを確認した。  |
| 3. 自己愛人格傾向についての素因－ストレスモデルの検証                 | 共同発表<br>(筆頭) | 2004年9月  | 日本健康心理学会第17回大会                         | 自己愛人格傾向には精神的健康を支える働きがあるが、それはストレスの少ない状況に限定されたもので、ストレスの多い状況ではストレス反応を生じやすい、ストレスに脆弱な素因と考えられる。   |
| 4. 対人場面におけるあいまいさへの非寛容が精神的健康に与える影響            | 共同発表         | 2004年9月  | 日本健康心理学会第17回大会                         | 対人場面におけるあいまいさに非寛容な男性はストレスラーが加わるとストレス反応が増大し、女性はハピネスを減少することが見出された。  |
| 5. 不登校を伴った睡眠相後退症候群患者の心理特性と入院治療の有用性との関連について   | 共同発表<br>(筆頭) | 2004年11月 | 第11回日本時間生物学会学術大会                       | 入院治療による睡眠覚醒リズムの改善率は100%で、退院後の睡眠覚醒リズムの未改善群は気分の変化が大きいことが明らかとなった。  |
| 6. 不登校を伴う睡眠相後退症候群患者の心理的特徴について－健常者との比較から－     | 共同発表<br>(筆頭) | 2005年6月  | 日本睡眠学会第30回定期学術集会                       | 不登校で睡眠相後退症候群を呈する患者の特徴として、引込み思案になりやすく、やや過剰適応の傾向があることが見出された。  |
| 7. 自己愛人格傾向と Positive Illusion との関連からみた精神的健康  | 共同発表<br>(筆頭) | 2005年9月  | 日本健康心理学会第18回大会・日本心理医療諸学会連合第18回学術大会合同大会 | 女性の自己愛人格傾向の高い者はポジティブ・イリュージョンを用いて、一部のストレス反応を抑制している可能性が示唆された。   |
| 8. 不登校を伴う睡眠相後退症候群患者の心理特性－病態の解明・治療指針作成の一環として－ | 共同発表<br>(筆頭) | 2005年9月  | 第25回日本精神科診断学会                          | 不登校状態で睡眠相後退症候群を呈している青年期の患者は健常青年と比較して、活動性が低く、内閉的で、不満の表出や攻撃性が低い面や自説にこだわり、出来事に無関心あるいは気が弱くて感情表出が難しい傾向が示唆された。  |
| 9. 自己愛人格傾向とあいまいさ耐性の関連が精神的健康に及ぼす影響            | 共同発表<br>(筆頭) | 2005年11月 | 日本パーソナリティ心理学会第14回大会                    | 女性の自己愛人格傾向の内部構造には対人関係におけるあいまいさ耐性を高めるものと低めるもののいずれもが存在し、アンビバレントな側面が示唆され、精神的健康にも影響することが明らかとなった。  |
| 10. 思春期・青年期の概日リズム睡眠障害の心理的要因の検討               | 共同発表<br>(筆頭) | 2006年5月  | 第102回日本精神神経学会                          | 睡眠相後退症候群を呈している思春期・青年期の患者は主観的に物事を捉える傾向が強いことが示された。  |

|  |              |          |  |  |
|--|--------------|----------|--|--|
| 11. 思春期・青年期の概日リズム睡眠障害の入院治療の有効性に関する検討   | 共同発表         | 2006年5月  | 第102回日本精神神経学会  | 入院治療によって睡眠覚醒リズムは改善し、その後、その改善が持続した者は全体の64%、不登校が改善した者は50%という結果となり。入院治療の有効性が示された。                             |
| 12. 思春期・青年期の概日リズム睡眠障害の入院治療の有効性に関する検討   | 共同発表         | 2006年6月  | 日本睡眠学会第31回定期学術集会   | 思春期・青年期の概日リズム睡眠障害は入院治療によって改善し、彼らの社会機能の低さが明らかとなった。  |
| 13. 自己愛人格傾向と対人ストレス・コーピングとの関連について   | 共同発表<br>(筆頭) | 2006年9月  | 日本健康心理学会第19回大会   | 自己愛人格傾向の高い者は対人ストレスに遭遇すると、積極的に関わって関係を改善しようと努力するコーピングを行うことが明らかとなった。  |
| 14. 自己愛人格傾向と自我状態との関連について   | 共同発表<br>(筆頭) | 2006年10月 | 日本パーソナリティ心理学会第15回大会  | 自己愛人格傾向と自我状態との関連から、権威的・支配的・排他的な側面があり、冷淡で他者の感情に惑わされにくく、自分勝手な行動を取りやすい傾向があることが示された。                           |
| 15. 自己愛人格傾向とタイプA行動パターンとの関連が精神的健康に及ぼす影響について   | 共同発表<br>(筆頭) | 2007年8月  | 日本健康心理学会第20回記念大会   | 自己愛人格傾向はタイプA行動パターンを促進し、タイプA行動パターンの中の敵意行動が促進されると抑うつ的になりやすく、完璧主義的傾向が促進されると自尊感情が高まることが明らかとなった。                |
| 16. The relationship between ego, narcissism and mental health.  | 共同発表<br>(筆頭) | 2007年9月  | Health Psychology in Asia.   | 自己愛人格傾向は厳格で責任感の強い自我状態や冷静で他者の感情に惑わされない自我状態、自己中心的な行動を取りやすい自我状態によって促進され、その結果、主観的幸福感を高める。                      |
| 17. An examination on coping in interpersonal stress of narcissistic personality.  | 共同発表<br>(筆頭) | 2008年7月  | X X I X International Congress of Psychology.                              | 自己愛人格傾向の高い者は対人ストレスに総字遇した場合、積極的に関わって関係を改善しようと努力した結果、抑うつ的になりやすい。   |
| 18. 身体脅威状況における自己愛人格傾向のストレス過程   | 共同発表<br>(筆頭) | 2008年9月  | 日本健康心理学会第21回大会   | 自己愛人格傾向の高い者は身体的脅威状況に遭遇すると、そのストレスをコントロール可能と判断し、積極的にそのストレス者に対処し、その結果、ハッピーネスを高める。                             |
| 19. 社会評価状況における自己愛人格傾向のストレス過程   | 共同発表<br>(筆頭) | 2009年9月  | 日本健康心理学会第22回大会   | 自己愛人格傾向の高い者は社会評価状況においても積極的にストレスに関わって解消しようとするのがわかった。  |
| 20. The effect of SST for students with trait of pervasive developmental disorders and psychoeducation for their parents.  | 単独           | 2009年11月 | Association for Behavioral and Cognitive Therapies 43rd Annual Convention. | 広汎性発達障害の特徴を持つ生徒に Social skills training を行い、その保護者に心理教育を行った結果、両者の精神的健康が改善した。                                |
| 21. The effective intervention in the students with trait of pervasive developmental disorders and their parents. -conducted social skills training and psychoeducation-                                       | 単独           | 2010年7月  | 27th International congress of applied psychology.                         | コミュニケーション能力に問題を持つ子どもの精神的健康は低く、その保護者や周囲の教員もパワーレスな状態にある。   |
| 22. Evaluating the effect of the program to improve communication skill for middle and high school students and their parents. - Social Skills Training and Psychoeducation were conducted with the teachers - | 単独           | 2014年7月  | 28th International congress of applied psychology.                         | コミュニケーションに問題のある中高生を対象に Social skills training とその保護者に心理教育を教員と協働して行った。その結果、生徒および保護者、教師の精神的健康が向上した。          |
| 23. 妻による夫の抑うつ評価の妥当性  | 共同発表<br>(筆頭) | 2014年9月  | 日本心理学会第78回大会   | 妻による夫の抑うつ評価に妥当性があるかどうかを検討した結果、抑うつについての夫の本人評価と妻の夫の抑うつについての評価は一致しないことがわかった。夫の抑うつ評価については本人評価が必須であることが明らかとなった。 |

|  |              |          |  |  |
|--|--------------|----------|--|--|
| 24. 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)の概要と進捗状況  | 共同発表<br>(筆頭) | 2015年9月  | 日本健康心理学会第28回大会   | 環境省主導で全国で行われている、子どもの健康と環境に関する調査(エコチル調査)の研究デザインと、10万人のリクルートが達成されたことを報告した。   |
| 25. The effectiveness of psychoeducation for the parents of children living with milk allergy.               | 共同発表<br>(筆頭) | 2016年7月  | 31st International Congress of Psychology.                       | 牛乳アレルギーの保護者に対して家族心理教育を行った結果、保護者の精神的健康が改善された。その効果はフォローアップ時にも持続していた。   |
| 26. 牛乳アレルギーを持つ子どもの母親を対象としたストレス介入プログラムの作成の試み  | 共同発表<br>(筆頭) | 2016年11月 | 日本健康心理学会第29回大会   | 牛乳アレルギーという同じ疾患を持つ子どもの保護者に対して、家族心理教育を行った結果、量的変数ではプログラムのポジティブな効果は認められなかったが、自由記述式のアンケートやプログラム内の話題からは生活に対する負担感の低下が強く伺えた。<br><b>優秀発表賞受賞</b> |
| 27. 体重増加不良児の母親を対象としたストレス介入プログラムの試み   | 共同発表<br>(筆頭) | 2017年9月  | 日本健康心理学会第30回記念大会   | 体重増加不良児の母親を対象とした家族心理教育を行った結果、母親の育児ストレスと精神的健康が向上した。   |
| 28. 食物アレルギーの心理面に与える影響に関する実態調査(1)   | 共同発表<br>(筆頭) | 2020年11月 | 日本健康心理学会第33回大会   | アレルギー症状を起こした回数が多い原因食物を持つ食物アレルギーの子どもの親は、アレルギー症状に恐怖感を強く抱いており、アレルギー症状を繰り返すことが恐怖条件づけを形成する可能性が考えられた。  |
| 29. A Psychoeducational Program for Relieving Psychological Burden of Mothers of Toddlers with Milk Allergy. | 共同発表<br>(筆頭) | 2021年7月  | 32st International Congress of Psychology.                       | 我々が開発した心理教育プログラムは牛乳アレルギーを持つ子どもの母親の心理的負担を部分的に軽減させた可能性が示唆された。  |
| 30. 食物アレルギーの心理面に与える影響に関する実態調査(2)   | 共同発表<br>(筆頭) | 2021年11月 | 日本健康心理学会第34回大会   | アレルギー症状を起こした回数が多い原因食物を持つ食物アレルギーの子どもの親は、アレルギー症状に恐怖感を強く抱いており、アレルギー症状を繰り返すことが恐怖条件づけを形成する可能性が考えられた。<br><b>優秀発表賞受賞</b>                      |
| 31. Impact of food allergy phenotypes on psychological burden in children and parents.                       | 共同発表<br>(筆頭) | 2025年8月  | 39th Annual Conference of the European Health Psychology Society | 卵や牛乳に対するアレルギー反応は小麦に比べて恐怖感を条件付ける可能性が高く原因食物に合わせた心理的介入の必要性があると考えられた。  |
| (学会発表・口頭発表)  |              |          |  |  |
| 1. 不登校と睡眠相後退症候群を併発した患者の入院治療の有用性と心理的要因の検討   | 共同発表<br>(筆頭) | 2004年12月 | 不眠研究会第20回研究発表会   | 不登校と睡眠相後退症候群を併発した患者の入院治療の有効性が認められ、改善群は自己主張性に乏しく、自責的で、気分変化が少なくのんびりであり、未改善群は適度な他責性はあるが、事なかれ主義的で、自分で問題解決を試みようとしやすい心理特性が示唆された。             |
| 2. 不登校・引きこもりを伴う睡眠障害患者の入院治療について   | 共同発表         | 2005年2月  | 第22回滋賀医科大学シンポジウム   | 入院治療によって、time cueを与えることで、多くの不登校・引きこもりを伴う睡眠障害患者は改善し、その改善を維持するために光療法を併用することで睡眠相の後退を防ぐことができる。   |
| 3. 統合失調症患者における個人 Social Skills Training の試み  | 共同発表<br>(筆頭) | 2006年2月  | 第98回近畿精神神経学会   | 個人 SST により、Social Skill の向上およびストレス対処パターンが増加し、精神状態の改善あるいは安定が認められた統合失調症患者の2症例を報告した。  |
| 4. 思春期・青年期の概日リズム睡眠障害の心理特性について  | 共同発表<br>(筆頭) | 2006年7月  | 第99回近畿精神神経学会   | 概日リズム睡眠障害を呈した思春期・青年期の入院患者には感情抑制傾向があることが見出された。  |
| 5. Wisconsin Card Sorting Test   | 共同           | 2007年11月 | 日本睡眠学会第  | 睡眠時無呼吸症候群患者の眠気は重症度とは関  |

|  |              |             |   |  |
|--|--------------|-------------|---|--|
| (WCST)を用いた睡眠時無呼吸症候群患者における治療前後の前頭葉機能調査                            | 発表           |             | 32 回定期学術集会  | 連しないが、重症度の高い患者には前頭葉機能の低下が認められ、眠気の誤認に影響していると考えられる。また、眠気の治療によって、前頭葉機能の回復が認められた。                              |
| 6. 初めての家族心理教育—トライアンドエラーを重ねて                                      | 共同発表<br>(筆頭) | 2008 年 3 月  | 心理教育・家族教室ネットワーク第 11 回研究集会                                   | 家族心理教育をはじめて病院に立ち上げるに当たってのコツやメソッドを紹介した。   |
| 7. 脳低温療法が著効した心室細動による心停止症例に対する神経心理学的検討                            | 共同発表         | 2008 年 5 月  | 第 21 回日本脳死・脳蘇生学会総会・学術集会                                     | 心肺蘇生患者に神経心理学的検査を行った結果、語の流暢性が選択的に障害される可能性が示唆された。  |
| 8. 統合失調症患者への個人 Social Skills Training の試み                        | 共同発表<br>(筆頭) | 2008 年 12 月 | SST 普及協会第 13 回学術集会 in 前橋                                    | 統合失調症患者にとって個人 SST は集団 SST と同様の効果があると考えられ、多様な治療スタイルを提供する必要がある。  |
| 9. アレキシサイミア傾向者における表情認知能力の検討                                      | 共同発表         | 2009 年 2 月  | 第 104 回近畿精神神経学会   | アレキシサイミア傾向を持つ者は表情認知能力が低い傾向にある。   |
| 10. 不登校生徒を持つ親の会の立ち上げと取り組み—学校との協働—                                | 共同発表<br>(筆頭) | 2009 年 3 月  | 心理教育・家族教室ネットワーク第 12 回研究集会・ワークショップ                           | 学校の教員と協働して、不登校生徒を持つ親の会を立ち上げた。その実践的な取り組みを紹介した。  |
| 11. 抗うつ薬の処方により問題行動が著明に改善した、反抗挑戦性障害の一例                            | 共同発表         | 2009 年 9 月  | 日本思春期青年期精神医学会第 22 回大会                                       | 暴力行為や不登校であった男児に抗うつ薬を処方することにより、問題行動が改善した。   |
| 12. うつ病の診断と治療により問題行動の著明な改善を得た反抗挑戦性障害の一例                          | 共同発表         | 2009 年 10 月 | 第 29 回日本精神科診断学会   | 問題行動が頻発していた学生の背景にはうつ病が存在していた。そのうつ病治療によって、問題行動が消失した。  |
| 13. うつ病と SAS との比較—HAM-D 構造化面接 SIGH-D を用いて—                       | 単独           | 2009 年 10 月 | 第 6 回アジア睡眠学会日本睡眠学会第 34 回定期学術集会第 16 回日本時間生物学会学術大会合同大会・シンポジウム | うつ病と睡眠時無呼吸症候群によるうつ状態は、HAM-D 構造化面接を用いて鑑別することができる。睡眠時無呼吸症候群によるうつ状態では非常に病識が乏しく、倦怠感が強い傾向にある。                   |
| 14. 見落とされていたうつ病の治療により問題行動の著明な改善を得た反抗挑戦性障害の一例                     | 共同発表         | 2010 年 2 月  | 第 29 回日本社会精神医学会   | 暴力行為を繰り返す男児の背景にはうつ病が長年見落とされていた。うつ病を治療することにより、暴力行為が明らかに改善した。  |
| 15. コミュニケーション能力に問題を持つ子どもの不適応行動予防プログラムの試み—本人と保護者・教員への介入—          | 単独           | 2010 年 6 月  | 日本家族研究・家族療法学会第 27 回福島大会                                     | コミュニケーション能力に問題を持つ子どもに対して Social skills training を、その保護者に心理教育を行った実践報告。                                      |
| 16. コミュニケーション能力に問題のある生徒への Social skills training とその保護者への心理教育の試み | 単独           | 2010 年 7 月  | 日本思春期青年期精神医学会第 23 回大会                                       | コミュニケーション能力に問題を持つ子どもに対して Social skills training を、その保護者に心理教育を行った結果、子どもの対人スキルは向上し、保護者と教員、子どもすべての精神的健康が改善した。 |
| 17. 衝動的な暴力行為を認める男児の一例—破壊的行動障害の背景に潜むうつ病—                          | 共同発表         | 2010 年 7 月  | 日本思春期青年期精神医学会第 23 回大会                                       | 衝動的な暴力行為を認め、スクールカウンセリングに紹介されてきた生徒に、発達障害による行為障害を当初疑っていたが、丁寧な問診を行った結果、うつ病が存在していることがわかった。                     |
| 18. 学校臨床への応用 シンポジウム 家族心理教育～認知行動療法との共通点・相違点～                      | 単独           | 2010 年 9 月  | 第 23 回日本サイコオノロジー学会第 10 回日本認知療法学会合同大会                        | 家族心理教育を発達障害の生徒とその親を対象に学校現場に導入した。その結果、親子だけでなく協働して行った教員の精神的健康も向上した。  |
| 19. 発達障害 診断はそれでだけでよいのか?—問題行動の背景に潜むう                              | 共同発表         | 2010 年 11 月 | 第 104 回日本小児精神神経学会   | 発達障害と診断され、問題行動が頻発していた学生の背景にはうつ病が存在していた。そのうつ病   |

|  |      |          |  |  |
|--|------|----------|--|--|
| つ病一  |      |          |  | 治療によって、問題行動が消失した。  |
| 20. 繰り返される暴力行為のために受診した13歳男児  | 共同発表 | 2010年11月 | 第30回日本精神科診断学会  | 暴力行為の背景について、診断面接を行った結果、発達障害とうつ病の存在が明らかになった   |
| 21. 加害児童の背景に潜むうつ病  | 共同発表 | 2011年6月  | 第105回日本小児精神神経学会  | 行為障害と他院で診断された男児に詳細な診察、検査を行ったところ、うつ病によって攻撃行動が促進されていることがわかった。                          |
| 22. エコチル調査メディカルサポートセンターの役割   | 単独   | 2014年11月 | 日本健康心理学会第27回大会研究・実践活動支援委員会企画シンポジウム 子どもの健康と環境に関する全国調査と健康心理学の貢献(北海道から沖縄までカバーするエコチル調査の実践)                     | 全国で10万人を妊娠期から13歳になるまで追跡調査している世界最大級のコホート調査であるエコチル調査への医療的助言・サポートをメディカルサポートセンターでは行っている。 |
| 23. 牛乳アレルギーを持つ子どもの保護者への家族心理教育の効果   | 単独   | 2015年3月  | 心理教育・家族教室ネットワーク第18回研究集会名古屋大会   | 牛乳アレルギー児を持つ保護者の精神的負担はかなり高く、家族心理教育を実施することでその軽減を図れることを報告した。                            |
| 24. 当院における家族心理教育の評価と取り組み   | 共同発表 | 2016年3月  | 心理教育・家族教室ネットワーク第19回研究集会東京大会  | 家族心理教育の効果を客観的な指標を用いて評価することで、スタッフのモチベーションを向上させることができた。                                |
| 25. 出生コホート研究一エコチル調査をはじめとして一 日本健康心理学会第29回大会会員企画シンポジウム 健康心理学をパワーアップする医学系研究入門一10万人規模の子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)の実践を元に一 | 単独   | 2016年11月 | 日本健康心理学会第29回大会   | エコチル調査の概要と目的を示し、国内外の出生コホート研究から得られた知見についても紹介した。                                       |
| 26. エコチル調査の方法とリサーチクエスション   | 単独   | 2017年9月  | 日本健康心理学会第30回記念大会ラウンドテーブルディスカッション 子どもの健康・成長・発達に関する調査への健康心理学からの寄与一子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)のリサーチクエスションから考える一 | エコチル調査の紹介と、リサーチクエスションの立て方について紹介した。   |
| 27. 体重増加不良児を持つ子どもの母親への家族心理教育の実践  | 単独   | 2018年2月  | 心理教育・家族教室ネットワーク第21回研究集会沖縄大会  | 体重増加不良児を持つ子どもの母親への家族心理教育の実践について紹介した。   |
| 28. 出生コホート研究から得られた子どものライフスタイル  | 単独   | 2018年6月  | 日本健康心理学会第31回大会会員企画シンポジウム 子どもの心身の健康を支援する健康心理学一現在進行中一  | 出生コホート研究から得られた知見をもとに、現代の子どもの成長に関連する環境要因について紹介した。                                     |
| 29. 心因性食物アレルギーの形成過程  | 共同   | 2022年11月 | 第59回日本小児   | 身体的な寛解後も食物アレルギーであった原因  |

|                              |    |          |  |  |
|------------------------------|----|----------|--|--|
| の検討                          |    |          | アレルギー学会<br>学術大会<br>APAPARI2022 合同<br>開催<br><b>座長推薦課題</b> | 食物を食せない子どもが臨床場面では散見される。我々はその状態を心因性食物アレルギーと名付け、実態調査を行った。その結果、卵と牛乳が原因食物である場合に、心因性食物アレルギーが生じやすく、小麦が原因食物である場合には生じにくいことが分かった。                                 |
| 30. 心因性牛乳アレルギーの予防プログラムの作成の試み | 共同 | 2025年2月  | 第31回日本行動医学学会・学術総会<br>第26回日本子ども健康科学学会学術大会 合同開催            | 心因性牛乳アレルギーの予防プログラムを作成し、そのフィージビリティ調査を行った。その結果、プログラムとワークブックによって牛乳アレルギー治療に対して前向きに、主体的に子どもが取り組めるようになるツールとなっていることが示された。本プログラムが心因性牛乳アレルギーの予防や寛解へ寄与する可能性が示唆された。 |
| (講演)                         |    |          |  |  |
| 1. 認知行動療法としての SST            | 単独 | 2005年12月 | 滋賀 SST 研究会   | 行動に重きを置きがちになる、現場での SST において、認知に焦点を当てることで、治療効果を高めることができることを解説。  |
| 2. カウンセリング                   | 単独 | 2006年12月 | 滋賀医科大学附属病院緩和ケアミーティング                                     | 患者の話に耳を傾けるコツ、「聴く」姿勢について、全科の医療スタッフを対象に解説。   |
| 3. 発達障害                      | 単独 | 2007年7月  | 光泉中学・高等学校職員研修会   | 近年、教育現場において問題となりやすい発達障害について教員を対象に解説。   |
| 4. 外来 SST                    | 単独 | 2007年6月  | 滋賀 SST 研究会   | 外来患者を対象に行う SST について、そのメリットとコツを解説。  |
| 5. 思春期のこころ                   | 単独 | 2007年7月  | 光泉中学・高等学校保護者会  | 思春期とはどういう時期なのか、思春期に特徴的に見られやすい心の病気や症状について保護者約 800 名を対象に講演。  |
| 6. 中高生の悩み～スクールカウンセリングを通して～   | 単独 | 2008年3月  | 滋賀県うつ・不安障害研究会  | スクールカウンセリングにおける相談内容・スクールカウンセラーの役割について、医療関係者を中心に講演。   |
| 7. 思春期の子どもの悩みとその対応           | 単独 | 2008年6月  | 滋賀医科大学市民公開講座   | 思春期の悩みについて概説した後、子どもの症状をコントロールするには家族が元気になることが必要であることを一般市民対象に解説。   |
| 8. 対応のこつと心理教育                | 単独 | 2008年7月  | 光泉中学・高等学校職員研修会   | 心理教育とは何か、その必要性について解説し、日々の指導に役立ててもらおう教員を対象に講演。  |
| 9. 発達障害の概要とその対応              | 単独 | 2009年7月  | 光泉中学・高等学校職員研修会   | 学校現場で問題になりがちな発達障害を持つ生徒への対応とその特徴について解説した。   |
| 10. Social skills training   | 単独 | 2010年6月  | 光泉中学・高等学校職員研修会   | 学校教育でも使える社会技能訓練についての解説とデモンストレーションを行った。   |
| 11. 思春期の子どもと元気に暮らす           | 単独 | 2010年7月  | 光泉中学・高等学校保護者会  | 思春期の特徴を理解したうえで、子どもの健康を保つには親が健康でいることが大切であることを中心に講演。   |
| 12. 子どもの生きる力を育む              | 単独 | 2010年10月 | 滋賀県立八日市西小学校 PTA 子育て講演会                                   | 思春期心性の特徴について解説を行った。親としてどのような対応が望ましいかを検討しながら示した。  |
| 13. 自分を見つめる心理学               | 単独 | 2011年1月  | 岐阜県高等学校教育研究会保健部会岐阜支部養護教諭部会                               | 被援助者を元気にするためには、周囲の者が元気になる必要がある。認知の変容についてもワークを用いて実践形式で行い、解説した。  |
| 14. 家族心理教育を用いた選択的予防プログラム     | 単独 | 2014年12月 | 日本健康心理学会メンタルヘルスプロモーション研究部会                               | これまでに取り組んできた、食物アレルギーや体重増加不良児の保護者を対象として、家族心理教育を用いた予防的介入プログラムについてプレゼンテーションした。  |
| 15. 実行プラン作成                  | 単独 | 2015年1月  | 平成 26 年度環境   | 2 歳児への採血を含む医学的検査の実施を実現す  |

|  |                 |            |  |  |
|--|-----------------|------------|--|--|
|  |                 |            | 省子どもの健康と環境に関する調査(エコチル調査)医学的検査担当者研修         | るために、現実的な実行プランを作成してもらえようワークショップ形式で講義を展開した。                         |
| 16. 実行プラン作成                                | 単独              | 2015年3月    | 平成26年度環境省子どもの健康と環境に関する調査(エコチル調査)医学的検査担当者研修 | 上記と同様。   |
| 17. グループワーク                                | 単独              | 2017年1月    | 平成28年度環境省子どもの健康と環境に関する調査(エコチル調査)4歳詳細調査説明会  | エコチル調査での2歳児詳細調査を振り返り、スタッフのエンパワメントを促し、4歳詳細調査への問題解決法を検討した。           |
| 18. 不安とのつきあいかた                             | 単独              | 2017年4月    | 日本障害者雇用資格認定機構講演会                           | 不安とは何か、不安を克服する方法にはどんな方法があるかについて、認知療法の一部を一般の方を対象にレクチャーした。           |
| 19. 強みを生かすキャリア形成                           | 単独              | 2022年8月    | 株式会社FMFS社員研修会                              | キャリアプランについて実行可能なプランの立案をワークショップ形式で行った。                              |
| 20. 自分にとっての「子育て」とは？<br>一正解のない、自分の答えを探ってみよう | 単独              | 2024年8月    | なみの会10周年講演会                                | 自分の子育てや自分自身を振り返り、ストレッチを見つけるために、ワークを取り入れながら、子育てに悩む方々を対象に講演を行った。     |
| 21. アレルギーと健康心理学                            | 単独              | 2025年5月    | 特定非営利活動法人健康心理教育実践センター研修会                   | 健康心理学観点から見たアレルギー疾患についての解説とその対応、予防について解説した。                         |
| (研修会主催)                                    |                 |            |  |  |
| 1. 滋賀SST研究会                                | 共同              | 2004年12月   | 滋賀医科大学医学部                                  | SSTの地域普及と、SSTに携わるスタッフの技術向上のため、研究会を主催した。講義とグループワーク形式で行った。           |
| 2. 滋賀SST研究会                                | 共同              | 2005年12月   | 滋賀医科大学医学部                                  | SSTの地域普及と、SSTに携わるスタッフの技術向上のため、研究会を主催した。講義とグループワーク形式で行った。           |
| 3. 滋賀SST研究会                                | 共同              | 2006年6月    | 滋賀医科大学医学部                                  | SSTの地域普及と、SSTに携わるスタッフの技術向上のため、研究会を主催した。講義とグループワーク形式で行った。           |
| 4. 滋賀SST研究会                                | 共同              | 2007年6月    | 滋賀医科大学医学部                                  | SSTの地域普及と、SSTに携わるスタッフの技術向上のため、研究会を主催した。講義とグループワーク形式で行った。           |
| 5. 滋賀SST研究会                                | 共同              | 2008年2月    | 滋賀医科大学医学部                                  | SSTの地域普及と、SSTに携わるスタッフの技術向上のため、研究会を主催した。講義とグループワーク形式で行った。           |
| 6. 標準版家族心理教育研修会                            | 共同              | 2009年12月   | 心理教育・家族教室ネットワーク                            | 家族心理教育を効果的に実施できる人材を幅広く育て、広く心理教育の普及を図ることを目的としたインストラクターの養成講座。        |
| 7. 標準版家族心理教育研修会                            | 共同              | 2011年1月    | 心理教育・家族教室ネットワーク                            | 上記と同様。   |
| (研究費受入)                                    |                 |            |  |  |
| 1. 概日リズム睡眠障害の光感受性と遺伝子異常                    | 共同研究<br>(研究分担者) | 2004-2005年 | 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)                       | 研究分担者として、概日リズム睡眠障害患者の入院治療の有用性と心理特性について検討し、多数の学会発表と論文を共同研究者と共に作成した。 |
| 2. 自己愛人格傾向のストレス対処                          | 研究              | 2007       | 文部科学省科学                                    | 研究代表者として、自己愛人格傾向のストレス対   |

|   |       |             |                                |  |
|---|-------|-------------|--------------------------------|--|
| 程における基礎的・臨床的検討－介入に向けて－  | 代表者   | -2009年      | 研究費補助金<br>若手研究(B)              | 処過程に焦点をあてた検討を現在も行い、多数の学会発表および論文を発表している。臨床場面において問題になる自己愛人格傾向の高い者についての臨床的介入についても検討。  |
| 3. コミュニケーション能力を問題とする生徒の不応予防プログラムの開発とその有効性の検討－生徒とその保護者への心理教育および認知行動療法的介入を通して－  | 研究代表者 | 2010年       | 笹川科学研究助成                       | コミュニケーション能力の低い生徒への Social Skills Training とその保護者への心理教育を教員と協働して行うことで、生徒のコミュニケーション能力を向上させると同時に、生徒および保護者教員の精神的健康の向上を図る実践的研究。        |
| 4. 牛乳アレルギーを持つ子どもの母親へのストレス介入プログラムの開発   | 研究代表者 | 2014年       | 平成 26 年度食と教育 学術研究助成            | 牛乳アレルギーを持つ子どもの母親への心理教育的ストレス介入プログラムを作成し、その効果を検討する。母親のストレス低減と対処能力の向上、子どもの症状の改善を目指すプログラムを開発する。                                      |
| 5. 中高生を対象とした抑うつ早期介入・予防プログラムの開発  | 研究代表者 | 2014～2018年  | 文部科学省科学研究費補助金<br>若手研究(B)       | 研究代表者として、中高生を対象とした抑うつ早期介入プログラムの開発と実践を行い、精神障害発症の予防的介入を行う。   |
| 6. “Evaluating the effect of the program to improve communication skill for middle and high school students and their parents. - Social Skills Training and Psychoeducation were conducted with the teachers -” | 研究代表者 | 2014年       | 公益財団法人日本科学協会平成26年度海外発表促進助成     | コミュニケーション能力の低い中高生への Social Skills Training とその保護者への心理教育についての効果について、28th International congress of applied psychology での発表費用への助成。 |
| 7. 牛乳アレルギー児と保護者への心理教育的啓蒙プログラムの開発-子どもの病識獲得および子どもと保護者のメンタルヘルス向上-  | 研究代表者 | 2015～2016年  | 平成 27 年度食と教育 学術研究助成            | 効果を実証した牛乳アレルギーを持つ子どもの母親への心理教育的ストレス介入プログラムを元に、冊子を作成した。  |
| 8. 牛乳アレルギーの啓蒙活動－牛乳アレルギー児とその保護者のメンタルヘルス向上に向けて－   | 研究代表者 | 2017年       | 平成 29 年度食と教育 学術研究助成            | 牛乳アレルギーに関する正確な知識を一般市民に普及させることを目的に、冊子・DVD等を作成し、牛乳アレルギー児とその保護者の心的負担感を軽減することを目指した。  |
| 9. 牛乳アレルギー児のアドヒアランス向上プログラムの作成－牛乳アレルギーの真の寛解へ－  | 研究代表者 | 2018年～2021年 | 平成 30 年度食と教育 学術研究助成            | 牛乳アレルギーの治療や寛解へのアドヒアランスの向上を目的としたプログラムを作成すると同時に、牛乳アレルギー治療アドヒアランス評価尺度を開発する。   |
| 10. 心因性食物アレルギー形成の解明と寛解プログラムの作成－食物アレルギーの真の寛解へ－   | 研究代表者 | 2018年～2021年 | 平成 30 年 公益財団法人ニッポンハム食の未来財団研究助成 | 学童期の子どもの心因性食物アレルギーのメカニズムについて、行動分析を用いて解明し、心因性食物アレルギーの寛解に役立つ系統的な治療技法の作成を目指す。   |
| 11. 食物アレルギー児の治療アドヒアランス向上プログラムの作成－増加する食物アレルギー治療への貢献－   | 研究代表者 | 2018年～2021年 | 平成 30 年度三菱財団社会福祉事業・研究助成        | 食物アレルギーの小学生を対象に、原因食物への拒否感の形成過程とその寛解へのプロセスを検討し、治療アドヒアランス向上プログラムと治療アドヒアランス評価尺度を作成する。   |
| 12. 「食物アレルギーの真の寛解へ－原因食物別プロシジョンサイコセラピープログラムの開発」  | 研究代表者 | 2022年～現在    | 令和4年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)      | 食物アレルギー治療の阻害要因となる原因食物への心理的な拒否感を寛解することを目的とした各原因食物に応じた心理的治療介入プログラムを作成し、その有効性を検討する。   |
| 13. 「オンライン版牛乳アレルギー児アドヒアランス向上プログラムの作成－心因性牛乳アレルギーの克服へ－」   | 研究代表者 | 2022年～2023年 | 2022年度食と教育 学術研究助成              | 生理的には牛乳アレルギーが寛解しても、牛乳・乳製品への拒否感やアレルギー症状発症への不安から牛乳・乳製品を摂取できない状況を心理的牛乳アレルギーと定義し、その寛解を目的としたオンラインで実施可能な動画とワークブックの開発を行う。               |

(注) 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。